

徹三と齋の母、つまり平吉の妻はなほ、腎臓じんぞうを患かかひ、齋がロンドンへと発たつた8日後に亡なくなつていた。父にまさる信仰心で、家族を守り、事業を陰ながら支え続けた母の死に目に会えなかつたことが、より齋を父に寄り添わせ、事業欲に駆り立てていた。

事業に関わらない兄妹たちも皆、クリスチャンである。

長男十太は学識高いが体が弱く、次男俊次は元町でテイラーを営む松野家に養子に入つた。平吉と齋の正装も、徹三が新しく仕立てた背広も、俊次の仕立てである。四男昇は、豪腕の父に対する反発心が強く家に縛られることを嫌い、六男潔はまだ学生である。

徹三の姉、長女の淑子は、士族佐野精一のもとに嫁ぎ、妹の雪子は水上政五郎という牧師の家に養女に入つた。

そして、村岡家にはもうひとり、母方、芝家の従妹いとこ、ハルがいた。ハルの父は横須賀で質屋を営んでいたが、店が立ち行かなくなつたため、義兄にあたる平吉を頼つて福音印刷に勤めた。平吉は女中奉公に出されていたハルを引き取つて、指路教会関係者が設立した住吉女学校に通わせ、娘同様に育てたのである。ハルは特に雪子と仲が

良かった。

明治37年(1904)、福音印刷の神戸支店設置に伴い、ハルの父は神戸に転勤となり、一家で神戸に移り住んだ。そこで自らも製本の女工として働いたハルは、会社の月曜礼拝の説教をしている賀川豊彦かがわとよひこと出会い、大正2年(1913)に結婚。

3年間の夫のアメリカ留学中、ハルは横浜の村岡家から共立女子神学校に通つて勉強をし直した。そして再び神戸で夫と共に貧民街に暮らしながら、貧しい人々の救済と伝道活動が続けている。

「銀座はどうだ？ うまくいっているか？」

平吉が徹三に聞いた。福音印刷は大正3年(1914)銀座に進出した。銀座4丁目1番地にあるアメリカ・メソジスト派宣教師が設立した出版社、教文館きょうぶんくわんの裏のビルを買ひ受けた。徹三はその銀座店を任されている。

「はい、まずまずうまくいっています。教文館の他にも救世軍きうせいぐんや、築地きよじの基督教興文協会からもずいぶん仕事を廻してもらっています。ただ、最近は組合がすぐ騒ぎ出しますからね。この間は、僕が築地まで大八車を押して、聖書やキリスト教関係の本を売りに行きましした」